改正

翁問荅

上

9
3884
1

9
3884
1

天保二年磨滅補刻

中江藤樹先生著

改正翁問答

東都書肆 嵩山房

昭和27
蔵書

翁問答序

志学の年より心ゆきもとめ身は行ゐき。道理を
もとめ得まくおもひ立て。禅門教門に。釈教と。年
を経て学とのへども。其言詖遁にして其道偏僻なり。その
法まことに人倫日用に。受用はたのまるゝなり。儒門
に入て四書五経の聖教をうけて切磋琢磨をこゝま
でゝ三隅を反せざる程の愚なれども。開悟自得
をようしらでゝすでに。道に立ゐき。年をも。をくうちゐ
ぬ。愚者はあやまれるなり。ひとたび性に帰さるゝを。
忘るゝ。師範。其人にあらざるとこゝろびの哲の

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

先学もゝなとゝ寤寐よりまれなる隣里に天君とて
逸民とおぼしき老翁ありけれとゝ友れうるまて
訪たゝずして杖を取てまゐんとけれ我眼力伯樂あ
ねじ駑駘なりとゝ感儀いとけなく
人あひ和泉ゝして謙遜なる俗儒れ意氣たく
しくロに乳たゝれよりひ心なゝびきさうくやま
りまて暇れ日ハ常ゝ傍ゝ侍れとゝも心ゝ向ゑきた
くゝかけまた兵山賊の花ゝむゝれゝ異なゝびゝ下
ゝ体元とて儀表たゝるゝ人きて平日疑問論難やむ時か
しゝ傍ゝて聞とゝくゝも心れをよゝねきゝく記憶り

わゝるゝと心れ粗通ゝるこゝあまた退て儀語ゝて書つ
け遺忘ゝこゝろゝあゝぬゝくゝして年を流りねまゝで箇条
数多ゝなゝり心ゝよまゝるゝ学ゝ行ゑき道理もずゝて
用悟ゝ似ゝる様ゝ上のまたゝ我ゝゝとき九愚
者あゝハ万一工夫のたゝるけゝもなるゑきりとゝおゝなゝ
うゝ翁問答と号して巾笥にゝくゝおきけ
れ言葉いやゝゝ理ゝゝかゝけまゝでゝも道ゝ法
ゝくゝ正とゝべゝきかゝのゝこゝとなゝねゝじ兵愚ゝれ書つけ
るまゝにゝて翁し来意ゝたゝゝ示ゝおゝくゝあゝハゝ
若ゝよゝむゝあゝく婦ゝみて志なゝて書ゝゝ氣人の大

翁問答巻之一

仏免問曰人ゴトキ心ゴヽロヲ学ばずして行ふれば
それうちに色也混沌して いづまよりぐんぐんとも
おほ人と人間一生涯のうちいつまれ道をも受用れ
ざるべくいや
所謂曰人の為れうちに至徳要道をそなへ天下安
の実実ありしたがうをいふ心ままもなく行ふ
めとまるなり此実なきもいて五倫の道を行へば
倫れ君臣和睦して父子兄弟神明
ひとつまれ神明納受たまふ所をもいて

天下を治まれば天下平らかなる。国を治まれば国平らかなる。家を斉へば家ととのへられ身を修むれば身をさま
る。心よまもまたん明なるをおしひろむる人は天地の
外よりきたるとはさしもまたふかき心の窓をかかるれ。
まことに神妙霊極の実究たる志ある人はたゝ
なをらく守るまたは天子八方の海の富をたもち諸
侯八方ぐ一国は業花をうけ卿大夫八方は家をお
こし士は名をあらはし伍をあらし庶人八財穀をつと
めて其楽をたのしむ心実をすてゝ人倫の
道をすてゝ人間の道たゝざるのみならず天地はもも

きゝ天地の道たゝざるのみならず大虚は神化も
おこなはるゝ大虚三才宇宙鬼神造化生死をこと
ごとくみて包括するやゝ実をもとめ学を儒者
の学問と云なり生れながらにして保合してをく守り
を聖人といふ学問するそ保合してをく守り
行ふを賢人と云なり孔子孟子世のやこをてゝえん
ためには実をもとめまなび境よ孝弟をたゝ
ふとゝ人ども秦は代よりこの方二千余年のる。
すゝみよく学ぶる人まなびたり今大明の代よい
よりて能知らるゝ人お国大舜八は実をと保

合し給ひて。庶人の中より天子に位をのがれ給ふ
文王はたゞ〳〵を保合たまひて天帝はたゞ
まさしく董永はゞ寡を守りて天の孤女と妻
となり。呉二はたゞ〳〵をまもりて宿悪の天刑
をのがれきたり。古来吳治くるはたゞかゞよ
くく信仰して受用とべきあるや
体元曰。ちうはたゞ〳〵ことにもとめまかりさす
めくくこゝろおもち廣大なる道おもたゞ。ちくとう分
ふてはおよびゞくおぼへは
所義曰。それいかゝ心得めては。廣大なる道なり。

聚人のおよぶ事みて。はゞ日月のひかりは
廣大なるがゆえにて。用ありるかとのものはのまくく
用得がゝごとし。たゞ〳〵し廣大なる道。貴賤男女
をゝこゝろおこれきも老〳〵るも中心あるかどの人
そのまもくまもるもおこなふ道をていはたゞ
天よりてはゞ天の道とかゝ地よりてはゞ地の道と
なる。元来名はなきものあれとも。流出にたゝ人
ためふんためふむりはゞ聖人其光景をかゝどるて
孝とくづけたまふそれもこのゝ愚孫不肖の、
婦男婦女よいろまでも。其名をばとゝへども

これ真実の道理をハ。老師。宿儒。知見抜群の人々。さとりぬることまの当たるを。世俗者ハ親よりうる。一まとなりて。浅近の道理なりと思う。孔子だけうりくお問ひ。第世の言葉をひらかへためよ。孝徳神妙。不測。廣大深遠なりて。始を孫の神道を。孝孫よ発明たまへ。孝徳の感通をてらくもづけ。人々。敬の三字よりきハ。なれ。敬ハ福ごろよりもくしむ。敬ハ上をうやまひ。下をうらやまひ。ものごとに。敬なり。孝ハたとへ。物の体の。ちひさくとも。敬と名づけて。

後のうもれ。けハ。ものこと。あきらかにつ。ひ。ものこの神ハ。おすぐ。むしの。なりてのごとく。父子。君臣。の人倫。よ。おもしろ。人。ハ。ふ。義。よ。ふ。ハ。れ。ま。敬の至徳ハ。通ぜざる。ハ。なし。つ。ま。大概を。論。る。よ。先五倫を。ひ。く。へ。で。親を。敬。る。ぐ。感通。ハ。根本。なり。友。よ。ぶ。の。名号を。あ。ひ。孝行。ま。づ。け。て。ざ。て。それ。ち。感通の光景。よ。りて。名を。きて。ち。人を。ま。た。ま。り。二心なく。ま。を。敬。する。ば。忠。なり。つ。ハ。礼儀正。く。ぶ。下。を。ま。敬。する。を。仁。ま。ぶ。く。ぶ。く。ま。ま。敬。する。を。慈。と。

ゆく。和順して先祖を敬するを悌と名づく。善
をせめて者を和し敬するを惠と名づく。正しき義を
よりもとして夫を敬するを呼と名づく。儀を守
て妻を敬するを和と名づく。偽なく朋友に先
敬するを信と名づく。一芸をいとなみて耳目の聰
明四肢の泰平。行住座臥の法則皆悉く敬の感通や
親切なる道徳なをば。ひとなる愚痴不肖の徒
男女共に六歳の幼童までもよく知り行ひ極つ
の極の自然は聖人と凡人とのへだてもなく
ひとしく不二の要道なり双の重寶なりとも和が種

しなりて世俗の間をてくさはりもなくけらい
きまたなるべし
躰元曰今までは親をよく尊敬の義行かるとも
あるべしなるべし。世俗さうは心ばせちとかんしたり
今先生のおしへをいかに孝といふるものはかもあるべし門
りさ。学上の無理なりまりと行ふ意さ術をくり
くらけたるなりくしは
問。論曰元来孝は虛をいとく全躰として万知
強ても強りなり まさに孝のなりさとさなく
孝のなりさをつ。孝論説は大虛を孝の

雜仏とあつて。天地おのづからの物どうのうちハ萠芽ゆ
ゑ。ひかくのごとく廣大無邊なる玄妙なるまでハ。第
一。万物の門よりの道理そなはりがたきハ。純中
ハ天地の德。第一物の靈なる人の心と身よりの
全雜。皆ゑ。ひかくなる人によるなり。身をふて道とお
ゐ。ふをいく。功夫の門をもとめ。離身離家。離者離
身。身よ。身を立道を行ふ。者の全雜なり。親よりく
ゐ。ふるものとかひ。身をとして道と行一事なり。身
をきつるゑ云ハ。元来父母の身なるをもけてゆ
けたる物なれハ。身を父母の身とおもひ
たゆ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ

怠ずして道を行と云なり。ひくのごとく勇をもて
道を行と。孝行の強所とするなり親よりおこ敬のま
ことを尽し。忠を尽し。先人の情を行ひ。
恵をかけこし。朋友よりハ。信よりでゝ。妻よりハ。儀を
かどもつ。夫よりハ。別を守り。かりうめゝ。伽をいたし
をこうのまも。不義をなさゝ。視聴言動。みな
道よりあらざる。孝行の条目とする。ものなり。志の孝行
一家ゆをあげ。こゝ。ひ。見なをこぶゝ。孝行の道理ハ
ひ。人ゝ。ふ。こ。孝。ゝ。のまゝ。ひ。ゝ。ゝ。ゝ

政の諸役をつとむるさふらひの位なり。抽つゝしを農と云。さふらひ、工と云。おさ人を高と云。この農工商の三つハ行なべて庶人の位なり。孝德ハ同一躰なれ共。位ありて。まゝの大小ある如ふを伝いふ。際ふ無の道理をぼ世時若のためふ。ふつ孤と説ひめ給ふ。たとへ。孝德ハ大海のごとく。又等の位ハ。乃ごとく。恵を海へ入るゝ水流ふしよ大小有如のしよふきかつ至とふ。ふハとまるごとふ。むゝ一味なるごとく。人の法ハ。人人の位ふ等のかハるきゆへふ。孝と名明し給ふ

一 体文問曰孝弟義揚の章ふ。父乃人倫ハいつゝ。中子事君と。忠の一典を説給ふハ。ふ。ゆへの

一 卿義曰君父ハ恩ふ。きものなり。父ハ恩ふ。君ハ義ふ。と云。ふ。ふ。命をたとつ恩なり。親ハ始なる如ふ孝ハ根本と。ふ。恩ふ。と云。ふ。さ如ふ中子事君と。第二ふ説て孝德。弟事。万物に感通する例となして。先賢夫婦朋友乃道をふ。のうちにふくこゝろ。孝弟の篇末ふ。ふ。事君の一義を発明し給ふ。ふ。

体文問曰天子乃孝行ハいつゝ

所翁曰。おし敬の孝德を。天下にあまねくするとき
子の孝行とは。こうこうの道をひろくするして
教化の大なるを。立定め。賢人を尊敬して。宰相
を。一。君人をおし敬して。義士をさげすびてそれ
くの友誠をさづけ。ふれの法をもおれとうし
すまし。禮樂刑政学校の教いと。すべて天下の
人ことに。ふれ心の孝德をもこして。その利を利せ
しめたのしみを。楽やうの民をおし敬を。ばい
海皆ようの道教を化し。流沢ふうれをひて。家ごと
に孝子。忠臣をみる。忠臣をしめして。天下一統を。徳をして

義国のようぶ心を。ひろくそうの先王を。法ふ。天
子の孝の。だいがいなり
躰元問曰。諸侯の孝行。ぶうく
所翁曰。おし敬の孝德を。一。必よあまねくにまろの諸侯
の孝行なり。先。第ち。心。ぶそ。四くして。おもおごろ
ことなく。財用の費なせいして。必持の作法をうく
まもの。家老大臣をうやまひ。法の臣下を。接す
て。情ようく。かうろめ。ふ。礼禮をもちひ。臣下の心だ
て。恩量をうく。試て。もの法を行ひ。義をさづけ。忠をさ
とまる。法をして。百姓をあはれこ。鰥寡孤獨

のたくるとなさことのをそうるそ。国中万民のうるおひ
心をはげで富さえなぐなぐ社稷をまもるそうれ先
君よつくめるハ。諸侯の若乃だいがいなり
体元向曰。御大夫乃孝行ハいぐ
帥孫曰。うれ位の儀ふるまひ敬の孝徳をおさう
みすうぐ。御大夫の孝なり心を正くして勇をおさ
ゑ。かりそめ乃行跡ふもんのもとなる。云第一ッ
もあさるぬやうよくけくしこ。君のなめ天下のた
め。国のきめのをおもひ入。私のいとなみ利害乃
くらべごとをば。家祖も心よりけだものなる時ハ。

天下国家安穏の政をかりしるべ。敵ハ大ねるとも
軍兵をさしつかい。軍法よく心ゆく。謀をめぐらし
百戦百勝の功をそなへ。伝をたもち。宗廟を守
めるハ。御大夫の孝なりたいがいなり
体元向曰。士の孝行ハいぐ
帥孫曰。かりうめあしこ。心なく。武勇を捨く。若後世
敬すう心をうしなハば。それくの儀ふるまもち
ひとめ。長をうやまひ。ぐい。侍者にたのそ
くゆなくくへのいやくうに。福ごろみてやもちふる
まい。云柔ばくさいやしうびこ。心たて勇もち。義理

おかるゝ肝要の禮法藝能などゝくゝ
軍陣のうちゝ又ハ君長の旅に釜ゝ鍋ハ樊噲と
もあざむく程の武勇をもつて武功をゝて其録位
をたもち名ふ祀をもあらハ士の巷行のだいぶいり
体元問曰庶人の巷行ハいかゞ
師翁曰農工商ハいづれもその所作をよくしたしめおこ
たゝば財穀をたくゝへむさとしたいついやさび勇もち
心ざしをゝこたゝ一ゝ云儀をおそれて法度をゝむ
ず亦勇ゝのまゝ父母二ゝ父母の衣服食物
ゝ共一ゝはたもひ入心力をつくして及ぬきハをも恨ゝ

父母のうけるまゝやうにもそなへてゝくやゝあ
ゝ庶人の巷行なり
体元問曰又等の巷の問只庶人ゝ父母と妻と
説給ハいかなる為あゝくいや
師翁曰士より上ハ財ゝとゝ〻ゝ〻ば貴ことは只
ちよつとも庶人ハ財ゝともゝくてゝ心をゝ
力をつくさゞれゝ衣服食物ゝ庶人ゝ
ゝ書ゝ説給ふゝ等ゝ
おもしろおもとゝて説給ふ道理ハみるお通ずる
ゝくゝ神通すべ一

傳元問曰又等の孝人の說を聞て人親を愛敬する
ばかり孝行あてはなくぞ此道をはさうりあり
てそもくのすぐいの所作を情よくしらしむるぞ
孝行のおく意あていや
師義曰さうあて單竟人の明德をはさうり
きるぞ孝行のおく意あていあに心よむさとまさる
一念をおこし或いうるまりきまよくはそよろ
ずまりさまをうつこゝねがまりさまを祈ぐ
いくやしまりさまとくさとおそれまり祝事をお
そるもみるぞ孝なり二云のはも不孝なりまり

不義をなをふおこちひ死をなさ愛ゆて死ぬ
死まりさおめくだ死をまりとるまり義をのを
ひさぶりとる意をもつてはて世家に及ぶ
するハ背いかの大なる不孝なり心よりけてぱくしを
まりるをきまちりぱ道理をあさうめて心よりちり
ゆよ行を儒ちの学問とりあり世君に学問する
人ハたくさんよいとゝもけおりをさとり拔ろ人ハまれ
ゆい
傳元曰又倫の道ろの名をハ形てゝもくりさ理を
不ないぱ全孝の心法日用の急務ゆてこゝ詳ゆ形ぬい

孟子曰倫ハ人倫なり人間の交際に分別あり五倫と名付くるなり五倫ハ書にあるなり五典と云典ハつゝしむ字なり五典を人ゝに教化するを教と云五典の心乃ち五つの性と云親と子と一倫なり君と臣と一倫なり夫と妻と一倫なり兄と弟と一倫なり友だちの交一倫なり是を五倫と云人の心に分別あり人なきものなり親ハ慈愛を行ひて子を教育し親の道と云夫ハ仁なり臣下ハ忠をもつて君に奉ずるを義の道と云夫ハ義人ハ

妻ハ順にして夫婦ハ互に交合するを別の道と云兄ハ惠を弟ハ恭にして兄弟ハ和睦するを序の道と云友だちの交だのしたしくまじはりを信の道と云ひ親義別序信の五を五典と云人の心ハ仁義禮智信の五常の性備りて為性の道なり五常の性感通して五典乃道となる父子の親ハ仁なり君臣の義ハ則義なり夫婦の別ハ智なり長幼の序ハ禮なり朋友の信ハ別信なり五倫ハ人ゝの理をもつぱら五倫

の道といへり。皆これよりいでて。我が心の中にあるところの
なりとおもひ。ものごとに。きはまりなり。天地万物みな
神明霊光のうちに生じ。他するところのなんぞよりて
我心の孝徳ばかりなるもの。神明に通じ。海内
あまねくなるべし。天地万物皆我が心孝徳のう
ちにあることのなり。譬へば。ある人。心のうちにだにあると
おもへども。根本心のうちに生じもつる力なり。色うる力
よりさとるたとへば眼より。内外遠近の見別あり
又偏のあるをおもひみるべし。いとひすて。内か遠近の
二見をたつるばかりなるべし。偏乃

道をこゝろに知らく論ずるまでなり。不典十義となれり。
その孝行と云ハ人倫第一の急務か
れ。人ハ聖人の教なり。又ふかく親と第一ま詭たる人
間。孝徳をのこらずとなりまハ父母の恩徳を
勧会とへ。胎育の始ハ十月の間母ハ懐胎の
苦をうけ。十病九死の身となり。又ハ子の保全養
育の安穏なるべきまをねがふ。まへ。くふ幸ハ
苦を心ふかくまつ。臨産の時ハ母の身ハ苦しき
ハかりのあやこをこけ。又の心ハ悲歎の苦をつくり
幸めしてこゝろ安穏なれハ今ハ無後の義をあり。

母をやしなはねばきにかゝりてゆかれぬ調
よみさしめぐりあふくゝ親のまゝ母の身屈伸をも
さびぬ身のつかれもいとはぬ衣裳
乃清くろひなでいとこえたぐゝ子の安穏をおもふ
是かハ他念なしとすこしにてもやこめまし饗を
もとめ神よいのり身をもてうゝんまをおりふし乳
喰三ものゝ子又母の苦勞をもすゝ知ゝ学のよ
ふなりぬまハ師をもとめ道を教藝をあゝ求
遠の人よりとぐまゝ事とねハいとゝでにあ家より身を
いとりぬまハ伝儒をもとめ奥ゆ業をたゝ富さゝん

事をもとりねがハゝうの子又遠人まゝさり仕合もと
さゝめまはゆがさりるく義の眉をゝきこゝまゝ
又徳も人母をたゝり仕合し人よおとりぬまハをさゝ
強ゝなげきとなせるゝ父母かゝのごとくれ恩も如
此の苦勞をつゝそゝ子の身を養ゝそゝぬまハ人の
子の一身毛一筋よりいとゝまで父母ゝ幸苦苦勞
思ひくゝるハ人ゝ父母の恩徳ハ天よりもゝるく海よ
りもぬゝ深大恩教乃恩なる義よ半心の
くゝさゝれ夫ハ報しゝ成ゝるく幸て恩ありとも恩
みさゝもゝ半ハざるゝと又ゝとゝ人ゝの歌ある程の

このハいろ〳〵愚痴不肖の。男女にてこれ
でも。一段の道をしくゝんとおもハゞこゝろ
道をしくゝんとおりハ孝徳のかゝ心ある友よ。その
こゝろ。のが。引くゝるものなり。中心の孝徳にて父母
の道をしくゝんとおもハゞ人欲のこゝろ
蔽くゝ明徳の日月光くゝ。心のやこゝろまの中に
かゝり。牛の一毛いひのゞる父母の厚恩をよく神祖
して。一段入道に比べくゝられハ人欲のこゝろ
の日月光おきしゝいにして心の闇くゝれ父母の厚恩
を報ゝ孝行。ものの孝行。用義とゝ。

ひ一合をいくゝ孝行の報ゝとゝ。孝経の聖謨
ゝ。ゝとして。ゝを立道とおこゝの大孝を立国を
ゝ。ゝ。其天間極厚恩を思道。心のこゝいとくゝ記を
道とゝ。ゝ。ひまゝひ人ゝ。ハ名勢ゝ。ゝ。鳥を
反哺の孝を行ひ。羊ハ跪乳のうやまいをなせり。人
ゝの形をうけくゝるものゝ。ゝ。おそゝ。ゝ。孝。心の
ゝ。ゝにまゝひて孝。ゝ。ゝのこゝきありさ。ゝを。ゝ。
ゝくゝとして。ゝ。ゝのいゝ。ゝ。ゝ。

まなくうやまひたいしやうし。悪云乃いうりをけ
て。孝道して尊とせば。父母をばのつがなしにあひ
ぬるし。一云の悪口をうけても。恭いうりのちりこの
さ海。或ハ父母にそむきて。妻妾あを忘し。或ハ父母
を捨てく。ふがゝをやしなはしあひもあり。とりまく親の
恩恵淡く。不義無道のあてがいのまゝ。ちうとをとこ
のさかつきの取りひをなせり。富貴成もとしいか
ちとなる。親人とうやまい。大切よおのふ。ふ。ふ。ふ。を
ぶる。妻あるに依てなり。妻妾を寵愛とするハ。ふ。ふ。の
歌をとげてたのしむ。あり。ふを忘すハ。ふ。ふ。の

をうけうるあるなり。ふ。ふ。なけまバ。富貴の和飾を
かさうる。ふ。ふ。地獄。まうさ。妻妾をたのしむ。ふ。ふ。
ものあり。父子に。ふ。ふ。のあくふ。ふ。色きあり。富貴も。
妻妾あり。子をば。ふ。ふ。ありてこれ。用にこのあ
をば。ふ。ふ。をはなれ。人ハ父母なり。父母は。ふ。ふ。をはさ
ぬ。ふ。ふ。よ。富貴の和飾をうけ。妻妾のたの
みをもあり。ふ。ふ。をそぐそ。老母のたをけ。もすると
つ。ふ。ふ。ハ富貴をさげる。人の道も。根本父母の恩か
つ。妻妾のたのしみをなれ。根本父母の恩なり。
ふ。ふ。の恩をうくるもの。根本父母の恩なり。ふ。ふ。の恩も皆

父母の恩なくさらハあるべ。父母の恩ハ廣大無辺なり
て。孝の大根本なり。志ある人に父母を和し敬するを
なをしておのゝ己ゝ能の人倫を和し敬ゝ道
をたこゝろを孝と云。野湖と云大根本の恩を忘
父母をハ和し敬せずして。他人を和し敬するを不孝と云情湖と云情
ゆえの人ハたゝひ純人無疵人ハ
人ばかりゝ必終よハ神ぶの罰に当るものなり。親
の恩無識ゝ不義無道のあてがいのうたをして不孝
なるをバまよう人る凡夫ハ
たり。一入まゝひの中乃生ひなり。其ゝ細ハ禮義ゝ。
なさけあるゝゝバ。一目も知ゝぬ道ゝなるとも
骨肉のおもひ。親もまゝ恩をいくもむゝ
ゝ後世ハ親の恩ゝ
ゝなてゝ孝ゝ
爲ゝ孝にあゝ親の恩湖ゝ。なてゝ世道なるゝ
孝ゝなゝ。
の行ひ孝ゝ
恩のゝき
くなりひなゝ。

ゆうさんぱは死ぬるものに天刑をうけるものなりかて
迷はしむ愚さ幸なり。孝りの家自数多なる
と雖ども。畢竟ハ二ケ条に法まるまり。第一ハ
父母の心れ安穏なるやうふとるるり第二ハ父
母の身をようくやまひ。苦なり。父母の心乃安穏な
ればうにまるよ先我身をたゝめ心を正くして好
人となりそれ〳〵のきりひ乃業をよく法とあ
財用を富まれば父母乃心よろこびにおひ貧
窮ふ及ぶ恐迷ふ〳〵さて妻子に教化
〳〵家門のまく法ゑ。氣をつゞけ。父母

を正し教〳〵ひりそめの下知もそしさおこたりけ。兄
弟一族。和睦をるるこにまれば父母付ふ事
入事。皆父母の心よりるひ。おのつゝ父母安樂ふなる
ものなりさそまこと而くうちくにまくるてすなる
人力をつくし。善力をはげまし乃ふ。ふら勇と妻子の
私用を求二ならして。一家の内の合和の滋味をそ
なへ。衣服の粗麁をさしげ。ゆうふも愉多を尽くし父母の
けうこゝろをやうにとるべし乃又疾ある時ハ医
醫の療治をもとめ。若病の労をたすけ。ねんくまに
のたいぐひ。ありて。又父母不幸あるべ。なにとなく父

母の感情あるべしいさしびしかるべし又母うるこゝに
してやうをなさば別て父をうるこゝめ若とかこ
し教をおこして親のいうはちうしあるべくば
のこゝろ我身もいさめ成ハ祖父の名をたの
みくいさしをし親ハ子をきとゝしひろやうに
ちうの春の雨一なり父母をそゝ天を明さるは何
ゆへ父ぐさ別の事なるは何ゆへ子時ハかりひさと
やをいて禮法をいとゝ葬をあり表はかく長風
を受ぶ廟祠堂をとゝくぶ鬼神はたゝ人ぶ時伝記忌
日の祭に滅敬をつくして合眞の孝なり さハしる

とゝの孝ゝゝなりたやのゝを意味ちうハ
ゝ義をもつゝゝの父滅を成孝ちうをとゝ
面産の苦勞をつゝりてゝのねうひのまゝう
をぶそめうを姫昌の先ゝゝ姫昌の先をハ祇
犢の恵ゝて牛の子をそゝぐれにたゝゝう姫昌
の恵ゝとゝゝあゝりてハ昌恵に似ゝれゝゝゝ
義理になりて必もかゝく油もかゝく膏獣はちゝく
ありあまハ畢竟ハ子をかゝくそゝ何ゝさゝゝゝの
八子ハ同ゝさゝゝ父ハ母やの身をとけそゝけ
ゝゝ父親の勇なりおやうけうゝ孝の義

もてるの身となりしうえのなまばるの身も
花ばかりの方なりぬをひさとうぶて、何
さるへ之さへ人ハ親の身を西道へおとしぬこ
とあるべきなるまゝふかくとゝへざるハ大不孝の中
一なり極又あをかこれもぬ孫なり家を破ぬ孫
あるぬ孫に及をもへ人ハしてぬ孫の繁昌をゝ
むるハ是なくしてゆくゆくハ絶滅するまひとり孫の
世付さ悪くありて、ぬがいよ〳〵のぼを作り〳〵
〳〵へぬ〳〵ぬ先乃をもとへ〳〵ぬ心の善悪ハ
ふ〳〵ぬ〳〵ぬ相ぬ〳〵ぬ人ぬ〳〵ぬ仕

合ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ人ぬの善ありと以へぬ〳〵ぬ〳〵ぬ
ぬ心の善悪ぬ〳〵ぬ〳〵ぬハ天地鬼神のあくぬ〳〵ぬ
ぬ〳〵ぬ〳〵ぬれハ一旦栄花ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ一代
二代のうちに孫孫滅するぬ〳〵ぬ〳〵ぬ絶滅せ
ぬれぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ
ひ人ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ相続せぬれハぬ〳〵ぬ〳〵ぬ祖の生涯
人ハ眼お一旦の富貴ハ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ
ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ祖の美名をハ〳〵ぬ〳〵ぬ
ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ
ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ〳〵ぬ

鶴の大鵬をまなびにてもかしこ。幼
ものの性を根ぬかとんむ。しかハ始終こそ胎内のあく
ゝちまも無道の業化なり。今時の人ハ。道理をこゝ
ろ得ぬ。おさなきうちハ善ハなき事のみをとと
おもへつゝ。業化の実をこゝろすして只ほていひ
とへめるこゝろを業とおもふ。おこりこゝろ。まひ
かり。猶ほ実の業化ハ。滅教なり。ほあてハとゝ人へ
すてゝ。身をこゝろを行ひてゞへのものつゝ要
化をこゝろを。滅教ゝ云。たゝ人ハ。の物をうゝ。ゝ。
の物なり。ゝ。ほの。水ほの。外ほ

よまもくゝ。ゝの業質ほこゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ほ。何ゝ。ほハ。元来。糸田舎の。義別なく。ほ。糸
ほの。ゝ。ゝ。糸。ほ。ゝ。ゝ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほの。ほ。糸。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。
ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。

をはりかくり方に行ひらく義の根本と墳墓
とへしハいたつあしたるつめる附ハ生付和相の
のりハ孝弟をよき世。なるとハ孝弟のうち意
開かる義とりろくくとあり。必ず能の
義をもつとゝべし。世付愚説ハ必ず能の
ゆゝしかんりかくさよハ孝弟の義理をつゝとなく
かくりきく世て孝道のお心をうしなつべし。
好人とかる義を尊とまべし。童の附ちの
義ハ師匠と友をゝしゆゝと義の肝要とゝはを
まさハゝそれくの意用よちくひゝれくの

運命を考く。如何の世理士農工商のうちを
うゝ定ゝ。先ゝに義の大方なり親と子を。
天来一躰分身なれバ。親の恩もゝの孝も世
法自有の親恩なる故に。聖人ハ義の始りを
ゝ親と説給へり。若ゝ仁と禮とをいらく法
ゝをさつゝふを指本とゝ。仁ゝ義理にちくうひて
人を教ゝ。ゝ法なり。禮ハ伝ゝの原理よちさゝひ
てゝをうやまひあれどくゝ法なり。ゝ下り
夫婦ハふの伝。さゝゝくありてゝつゝふ原理を
まりかゝとゝへゝ。畢竟ゝ仁禮の二法より

かハ有。全孝の心法ハ天地を蓋民乃大
父母とあり。て尺迷ハ。あ七人七人つるの形を猶
のものゝ皆兄弟なり。ゆゑに聖人ハ四海
を一家中。国を一人とおゞ。おゞ。めゝとなり。ゆゑ人と
の隔をなくし。ゆゑ。おゝくうとゝあゞどゝめるハ。
生ゝ化夫のんなり。禀賦享落ゝ下にゝゝ。
とあるゝ居下とハなれ。元来骨肉同胞の理あれ
たゝ人をかゝらせぬゝものなりゝ。ゆゑくゝあゞどゝ
ゆゝさゝゝにあゝゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ

勅とうけ士をあの餘。悪の仇牙なれば悪んとう
しあの屋うざうこしい。勿論なり。さて農工商を
因のたくなれば人へあはれこたごくみくば其利を
利として。其樂をたのしむじく。故をなれば悪の
仁禮を行ふなり。臣下は忠義をはげみ悪うつ
ふまつりを拵ふとは。忠を二心なく。筋に君乃
ためのこ。おもひへそれくの職分をとくはたしめて
系が方を捨てくなりそれくの位
はしりて大小の名別をあれども忠の心は各
別なるあり悪の道に敵の道にもしくおのく

為の理なり。親につかうごとくに心を尽して仕ふ
ばかりなり。親は形をうとそだたる恩なり
悪は身を安ん為なり。ばかりなれば悪
かし。悪なれば身の安ん為の業なり。命をたを
別悪なるあに。親ふも悪あを命を捨てくなる
ことの理あり。大臣の忠義なる。其まり大なるあに
人なりと云。小臣の忠義は二心なまり小なるあに。小なりと
云。道悪の嫌ふ事あるくも。悪の為なるのため
中の事めにとくさまなれば。道悪の為行ひ給ふ
やうふとくいさめをあり。道悪のなるきこのむまり

みくもぬ、きこと者忠や兵法ハ愚うに能
孫くぐ兵の心ぐてあ方ちぐ下ひ弟仲の
ぬを面ぬもゆくうに正忠ちぐくさくへ法ハやう
ふと一心ふ知もしくへ家ぐ方のためハかもかへつとん
ば勝を世下の孫くくる心をる身を捨て
世兵のた兵を才一ふ正るを大忠し云ハふ者
世ぐの忠臣なり。ハ非忠を兵ハ家。世兵の
下知に行くく一心に兵をうやまひ身を捨こうの
信くに織ぐを戦仕をる城ふ右と云ハふ身
ぐる長下のぐ云ハふ方軍忠をいく論正れハ

二心なくく身を捨くく礼義正しくく情ふくく英雄
の心をとり軍兵をもつけ謀を惟幄の中にめ
ぐらし勝ことをふ累のふに兵一。百戦百勝の
功をこるをハ忠と云ハ。ハ軍の大将のたる所なり
二心なくく身を捨さこうぐけをして城をつるさらば
をこれをふ右と云ハ。ハ。むしやの忠臣なりさて
中ハ。庶人をハ。棘茅の下と云。ハ。世に舞葉を
忠とあ。ハ。程をとぐるハ。世兵の忠法なりあり。技
物を兵ハくくれとる。ハ下と云なり。ハ。国の忠やこ
法度をハくく守。ハ。徽ぐをハくくつと兵くく年貢

公儀を憚慢せば。一心より忠義をおこされ。うやまわ
ゝ。庶人の君臣たり。君ハ仁慈の道に從て臣
下をつかひ。臣下ハ忠敬の礼を守りて君につか
まつりて。君臣交義まろ〻理天命の本然を
のづゝからの義なる故に。夫婦ハ人倫の義
と云たまへり。夫ハ和義をいゝ。婦を倡道とし
和ハ。夫ゝ婦ゝ和合まろ〻理なり。義ハ理に從ゝ
さいごへ。妃ゝを。ゝびまろ〻理なり。大抵夫
婦の礼ハ。和義の礼。頼の和に隨て。義理のさいごへ
ゝ。婦にまろれゝ。親子兄弟。骨肉の親を白
ひ。ゝゝまろ〻まゝ〻。ゝゝをむまゝ。婦ゝ
家を破。妻をうしなひ。ゝゝ。ゝ数をまろ〻
又ゝに。夫婦のまじわりそむきゝ。
婦足ゝ。皆人心の性ひかり。夫婦
のちゝ。人ゝのむまひ合ゝ。ゝ
相ゝ。ハ。形をうゝ初より。氣合の孫。天の定と
ゝ。ゝて。親のむまゝ。ゝ上妻ハ。
肥のたまゝ。孫ゝ孫のゝ始なれハ。ゝ
和合まゝ。ゝ。ゝ。ゝ。義理のさ
いごへ。ゝ。ゝ。ゝ

まず別段の常を失ふなよ。和と義との二つを
おのゝ夫の妻を偏頗とし妻ハ唱ふの二道を
ゆく夫婦つゝみ合なりとして唱ハ心ゝにうゐむ
よ。色のいひ乖ゝ。ちゐろまひまうでもやゝくろ
に出るゝゝ道なり。西ハ義理作法を正しく守る
道なり。妻ハ夫を天とたのゝ夫の家を。妻乃
家とす。夫婦一躰の理なる者に。我女生
の父母をハ父母とせゞして夫の父母を父母と
するハ。聖人の定め而して不易の天則なり
さらに先。男姑ふ。なりなる説唱西の道一

つにして。女の三道を守。女事をゝくゝとあ
仰法あゝしく。夫の下知に出るゝゝ。家を承ゝ
孫をそゝぐて宗族を。和睦し。家人に恩をかと
こゝに婦道の大概なり夫ハ陽道なるゝゝ。和
と治ゝく。和義の道をおこなうゝめて妻を偏
妻ハ陰道なるゝゝ唱西の道
とゝのゝうゝて夫に出るゝゝ。男女陰陽門和
の義別ゝくのごゝく。而して家おさ南り父母兄
弟子孫長幼。皆お親睦して和氣合同もろ
ゝ夫婦の乃別をかとゝ乃理天命の

なお徒づくあるに。不義の筋三ツ。夫婦の別と。兄弟へつゝ。貴ハ恃を以て。兄弟ハ恵を以て。恵ハ友朋との三義を自ら和ハ朽やの子と。おもはるゝからに。孤人ならに。こゝ。と云ハ。

友だちのたぐひに。切磋琢磨するがごとく。互ひに。あやまちを。ゆ。ゆ。を。ゆ。を。ゆ。を

孫のよくのおくそひあくだくひよかくさの
ありひをむさぶもあり分所連氣の程と云く
ば乱男あく我勇をそこなおのおりさ海愚痴
の至極おさまりきまりなく一同くやの
勇をかくせうたのあれども所詮の序り
よりて兄八実ハ縁に貴ありて恵恢の道
序をかとして作和かり天の定法に従り
てとのつくあるなよ義の貴ありを
初めて序と依法の明友ハたがいに信ふく
おまじりあとに伝ハ仮なく幾程よりあ儀

なりなくぐらのまーにに心友而友の見別情義
の親疎さ面くのうとくしし畢竟信の道とな
とんだくひの言をあじく交そうむを心友とい
志ハちくひあ迄たとそ兄八同郷陳家或
を同官同儀なくあくさいくお交くそうし
を面友と云一日知人も而友のうちより心友而友
ともに情義の親疎をなくうばうのかとくの
義程よりさくいて威儀ようくくく挨拶和合に
して仮なく分偏孤来なとのかも遠妻ちさ信
の道ハ大神なり世信ハ心よ真實におもひ人

きろ。ことをば。見性者悪をすてゝ信かりとお
もふ。大きなる心得そこなひありたるひとの実
よ。おもひのはざる事あるも義理ありかのみを信
じつゝ実よりおもひ入るゆゑもたよそむき
たる事をば人欲の仕とのみなり。世上の人乃交な
ろうよ。信のみよりおもひいらぬ道なり。信の道
まことにもかるひめ道ハたゞひに命ハ用ゐも之を
のがりまして。通俗の義理の道ハ財寶の用にた
のみまゝ。勿論なり。まことの信ハ。ものゝ
はたらきなり。梅心友の交ハ。君をせめくだひよ。
の。実実をみるこゝろ。ものゝ心むるゝ。所要なり。朋友なる
ものの。人も皆言実是言の天乃を大父母とし
て。ぱ道をるものの。道ハ形をいくゝ人道ハ他人の道
ども。たゞより兄道ハ同胞の理ある義に。実実安
の信の道をまりて。骨肉のおりひをあせりおれ
ば。天命のお拙。ものつゝある方乃なる道ハ義の
筆ゐる。朋友乃信と。拙信人を
統元問曰聖人乃教を倫し給ふ。事も必ずち
清者や
師義曰。ものゝ心ハ人ハ父子の親ハ。第化の源天叙

のりとなり。君臣乃義ハ極を違乃天儀人倫の綱要なり。夫婦乃別ハ生れ人倫お演のもとめ有り。此三ツ乃ものハ人倫のうちあり。綱要なる義なり。三綱と名付くるなり。三綱を先きづめに。倫し治ふ扱三綱の内あり。父母の乃たち天性にて。君臣の義をうけうけうへ人倫の道性にて。孝行の。条目あり。孝ハ人極の。第一義なるによりて一番に父子乃親とをしへ治ふ。君ハ父の母なひとしき故に親ふつうの義。孝をうつして。君をつふまるる。お臣とをしへ。極をたつる。

なりたるにより。第二番に君臣乃義とをしへ治ふ。夫婦ハ人倫お演の始生理の寓する所なるにより。第三番に。夫婦乃別とをしへ治ふ。兄弟ハ天倫の。ものしへ。骨肉同胞の愛。かりき故に。第四番に。朋友乃信とをしへ治ふ。朋友を異親同氣乃兄弟あり。天倫同胞乃親よりハかりきにより。第五番に朋友乃信とをしへ治ふ。扱又父子の親を添すて。典みる者ハ。孝行なる事ををめさんた。先ず。父子乃親を始めとをしへ治ふ。扱孝道をあきらかにするハ。朋友の。義を。せもるを

所要とする事を学あらんた矣て。朋友の信と
孤ゆるを〳〵治ふ。曾子の以友輔仁と云ふ所也
なり。畢竟大学を治みるに。善りの義なりと知べし
時宜のためよ。大典十義をもつて志あり治ふものの
なり。孔子道要道二字一貫の心法。〳〵文用也
ぶ。ここなり
体元曰。今生かりの位居ゆく。人倫のまどりの
初のごとくなる道。人典をよくおこるも。義乃ち
のいとなきにくくぶさして。孔子道要道といふべき
まあらば。人典の外。別に命上の乃あるべきあい

きいうで
師義曰。それ人相若の儀揚を閑あひてがこる
うさぶみくいは。相若人道の全体をよく見ぶけ
ぶる友に。生死の差別を分くにもけて儀
論をなし。義を立てうゆ。その彼裂の見を聖人ハ
異端となづけ治ひく。見に似る邪といふもの
みくいは。孔丈の見ふるよう人ハ。ここにかく言き
やうもこと。聖人の見ふにくくてハかくあるまし
死事みくいは。本虚元の道。一貫して生
死の差別なきのなり。聖人の儒道ハ生

死生の差別なくこそ。三教一貫の乃至をそなへ教
と雖学ばざるなれども人倫の道分内上の道
内上の乃至分人倫の乃至を立て立て。素其
位而行不願甚外。下学而上達。一貫の神乃
不二の妙理なり。人典の外。別に内上の一路を
やもとめたとへば。飯と湯をすて。別に飢渇をや
もとめるがごとし。実神妙の天
道をあらぶる者に。猶くさぐにまよひたる死
沙法とすべきや。儒門は人々進ひをもとし治べ
き事。人倫第一の義務なり。

一体元問曰世間の学問とるに足て学
問のあらましを云べき。答曰一切てかきあく
まで見るなる人あるべからず。正論学問をせね
ばまことの学問にいたらず。

一師翁曰人間はさまざまにおろかなれども
体の大小あるにたとへれば聖人一等。賢
人一等。智者一等。愚者一等。不肖者一等凡夫等
なり。凡夫等の門聖人を生知安行として学問せば
して法をあらためず行ひ治る人や聖人より下ハ

学問せざれハ法をしらずあさましく人倫
ハすて法をしらずをこなハざれハ人面獣心にて
形ハ人なれども人にあらざる獣と同しくして忠誠
無思の神理をしらずしたがひ世俗の情に人乃
かゝとうつるべきなれハいとなさ
しきことなるまゝ学問ハ人倫第一の急務なり
て飢渇の飲食をもとむるにひとしく誠に学問
をせずしてかなうべきことあらしとも学問に正実と質
と二度ハ疑ひ正実の学問ハよく知る義人まれな
れハ学ぶ人すくなし世間にもまれハ学問

ハ
為分質ならずハ質の学問をまれハ物の益も
なく却てかなしきぶれ実用になるものなれハ
正実と質のとうちをハ初学ハ不審
ハ免すべし

一 伊元曰学問ハ皆ひとしくあらうるゆ正
実と質と二色ありしら信ハいうべきなる義
別あるべきなり

一 師義曰正実の学問ハ伏犠の義始ハ傷乃為
王者ハ教も学問も正実のみハなりしか
世のをさまりてのち君子ハ文武

ゐの学問の質おのおのとなりて正邪はしびもるるものにも一家ハ
質ものそろり消めきて正邪とバ云うべきひさ
ゐくしあり主質りのハ落正邪とまるび物こ
かりて正邪とバ云うものゐていあにあせ者
学問りて正邪ハ法あり〳〵なるものそい

一 仏元日ゐせの学問ハなにくゐてはなるやう家
ない

一 師義日質の学問さ後〳〵ゐあまさこともに記
通詞章の学問〳〵ゐ家流この二つうく者

ゐ者ゐせるそいかにゐ者家者流陰陽家者流
家者流儒家者流墨家者流縱横家者流農家者流小
説者流楊氏者流大ゐハ分かりて内日本流儒
してひろまりたるハ記通詞章と佛氏と二ゐ
二つの内世俗の学問と〳〵ゐハ記通詞章なり記
通詞章ハ世俗の学問にて正のぶちくゐも志の
ゐやうと学問の仕やうまてゐ方里の誤とゐれり
〳〵〳〵ゐえ〳〵ゐ〳〵ゐるそいい
仏元日記通詞章の学問とハ〳〵ゐうゐる学問り
ゐや

原義曰其ようやく學問のことをてはじめ書六經ことに後子百家の書
をのこらずうこうえんと考詩をつくりはじめ耳のかぎり
利祿のもとめとのこしてはじの諸慢をかさぬ伝
儒の泥涌詞章の學問と云や
伊尹曰ごとの學問ばかりなる學問をてや
原義曰ごとの道をはなれ志の根本をうしなひ
書六經のかをとりて意事據扶の技量を弼
ゑとこの道のあるゝをみるこの笑し考ひ儒の
乃ち道者をとりゝ行ひ大和を保合ひ貞なる徳

ふはなるあるてもちてるる時は治あと言ひ天下を治め
伊尹大公の事業と云ひ世にあらはれて霸をなし
きは独善をよくし世を隠して命に応じて孔孟
の教化をなんと言ふこの學問と云や
伊尹曰佞儒のよし書もし書六經ぞ儒のこと
學書六經あてらく學問にさのこらがいはもつてきる
ふていはよし書物ばかりとものをくいはる佞儒の學問
あらくしも蓋なく節てあしく成らず高儒の學問を
も蓋なく節てあしく成ず節とはいはず
原義曰節理の精微をつくさはめんして人迹の発制

ちりをけがしてくへハはふ寓ちすてハ書六経よんと
迹と訓詁と二つの見あはへハ聖賢のほよの人路ふ
辨と分に行ひ法ふまとの二つを迹と云ことにの人
分に行ひ法ふ示のなかこの心器をハんと云やんハ云
ふ世代法ふ書と臭ふて書付まーあくハさう変よ
迹ちりを手付くを迹のうちに含蓄してハ世の
義とるせりをあとうちよそなりうんとハ書
六経のんと云やを迹を手のせくハ書六経のく字
のこと心を訓詁と云なりを訓詁とまるひこのとを
ちくきまへをくとうし用てふんの師範

とかーこをを減ひしハ心ををすれハ聖賢のんかふ乳
んとありをふんの師聖賢のんにたがりをんたな聖賢
のんにたがりをハ云りをのづくを君に止ものみ
ていかくのごくにまあををまの学ハと云や聖
賢ハ書六経のんを源として孔ふをまるあにん
学ともハ学ハ平人ちりハ人の伝よ心ものよてハ
友又聖学ともハ信儒ハ訓詁ちりハ耳にハ
ハハはよふまてまくハ迹の精微をふ人とさまふれハ
まりてんをとり用て源とまることハ義よもんざる
友にハ書六経をとりむとくハ訓詁を記誦してハ

耳のうきつとなんだらりゆてゝいかの赤柳よ強
泰の堀のぶつきたるもものなれば益はちくしてゝ
ゆくなりはるゝたりてゝ耳聾四書六経のんどゝ源と
してゝ学んを四するこをば耶んげずして只口耳の
かさり博学にかこるゝのこゝ勝と云る者よゝんゝ学ゝとゝ
いうゝしてゝは耳の学と云なり口耳の学ゝとゝ云かゝ
ど博学くゝゝゝゝゝてもゝんぶて身もちゝゝの身に対に
耳慢の驕んゝゝこたるものゝて聖人の位に至
こゝゝゝゝゝゝ友にゝゝこ倍学ゝゝも云なり口書六経よ
ん速側ゝの発ゝかゝゝゝゝゝゝ

富夫長男のんけ、もくちく森、こと次孫ゑよりかハ
かゝ、学問よりて文徳江業のハ、ようきとぐ、れうんこと、ハ、宴
めもかゝくに在り、富夫長男を、孫ゑひのまくにはとん
ゑハ、ゑ、ゑ、ゑ

勝に乗ずひても世上の富樂を素飯とすて
凡夫の小富貴を願ふる事と思ふ日月もて
なくさすあわれこれ思ひのまゝなる富貴にはいた
りがたく人の世間誠に長在不滅なりて死し
ても不亡天地終る壽不竟ものなれば彭祖八百
歳もまた一こゝに夭死よりとなく悲おもひのまゝな
る長生にあらざるや凡夫は逆ひをうんで逆にあるを
て偏まるによりて賤の庶をめぐるごとくに望ひさ
ぶらさぐひ計なり然は逆のとあゝ偏まれば仏の恵
もあるものあらくは

仏言曰夫儒のまさにうしるべきの形を任もの
あらくはなし
源義曰儒者を行人は天子諸侯卿大夫士庶人なり
は天竺の人なり玄法要を保合するを儒と云や
ある夜に天子諸侯卿大夫士庶人の形作なる儒の
まさにうしるべきの形のおのまさにうしるべき天
竺の生理にあるは玄法要を保合するを儒は天
竺の四ツて夷狄夷法とうるべ運命の移に
まかせて玄道の法をもとめをえばまれに他念なし
来たりて日ひは形の変化なり形あれば生あるは

世界をうるるてめ氣化乃運
命に學問ある事あるにてるるて人君の善さるひ
ふ貴富貴徳の発ふ者てく力の及ぶさにあらん
事上貴富貴徳はふのうぎるもハありとゝども氣
の正味ハとなるゞ之のなりり徳あに者ハ富貴をもね
ふ貴徳をもいとゝ貴徳ハ唯天理の高ふをたのし
むかハ他ものなりハ
伊元曰儒儒のゝ事をおしなべてひにとるゝ
むゞしくあらゝ者しれ
脩齋曰貴賤とは職業とさるハ司徒教育の職そ

ゝハひゞゝとあくハなくいは貴賤やうゞ大なるそこ
義やうゞふくゝハあうがゝさ貴傷るそいは貴賤
ありさにようて儒儒のそゝるをあるなれハ職業
ふ生るハよくゝとも義やうにひゞくゝありぬ人ゐ
ゐるべし
伊元問 文武を車れ者論語の者異のゝ
とゆなゝハは文ゝ武とハ二色りそゝやさそきさい
ゝうなるものと文武ゝハ中ゆ
脩齋曰文と武に世俗大なるゝ仕そこのひ法入は
世俗ハ弄と技術と他文学に達一氣ゝそもの

やはらかなるを文と云ふる長法と習ふ和
ゑぶそとけくいうりなるを武と云ふ〳〵せをみな
はるるこの仏ぬるめくいえ来文武ハ一徳すて
者別なるものあくハ天地の造化一気うく
陰陽の差別あるごとく人性の感通一徳すて
て文武の差別あるゆえに武ハ実の文に
ゆゑ文なき武ハ実の武なゆゑ陰ハ陽の
相となり陽を陰の相となるゆゑ文ハ武の相
となり武を文の相となるなり天を地と
準として天下を家とよく治ゑ富民さうゑ倫

の乱を忘〳〵する代ゑ文と云ふ天命をおそれざる武
道乱を乱のたゆゑ文乱をさきとゑるとさハ武ハ刑
の罰をもて〳〵武ハ軍をもて征伐して天下一
統の治をなしと武と云ふる夜に戈と止と云二字
とをハせて武の字をつくりゑ文乱を行なんゑ
の武乱なれハ武乱の相ハ文なり武乱の感を用て
治もるゑ乱なれハ文乱の相ハ武なりゑ和に文武
の二ツハそなれさるものなり学問ハ乱の乱と云ふ
おこるハ文なり孝悌ハ乱の乱とゑるものを
追治して治をとめおこるハ武なりたとハ春夏の陽

斗めく。秋冬の陰なく。秋冬の陰斗して春夏
の陽なくれば。万物を生成する造化の功能なし
と。陰陽二気の差別あるとゝ。(ども本来同
一元気の流行なるごとく。本来同一の道なれば。武だ
うめく文なきは。秋冬の陰のごとして春夏の陽斗
陽なきごゝとし。文斗にして武なきは春夏の陽斗
にて秋冬の陰なきごゝとし。文は仁義の差別武は
義礼の差別なり。仁と義は同じく人性の一道なるに
よりて文武もかゝのごとく一道にして者別あるものなり
らば仁義の道をよくさとりて文武のさとりをはむ

しにはなるむきたる文は文なれども。実は文は
あらず義にてゝむきたる武は武なれども実は
武はあらず文武の区味をよくかんがへられんのや
こゝとくく。万物のさとりをおもうべしとて。文
武は。道と藝とのなれ。仁義文の道をすべく。文
藝の根本なり。文は礼楽事数を藝として文
道の枝末なり。義は武の道にして武藝の根本なり
軍法射御兵法などゝ藝にして武道の枝末なり
根本の道を先一にして。つとめ学ひ枝葉の藝を学
一にして習ふ。枝末なり。文武合一なるべし。

実の文武といひ、実の傷寒と云なり文義をそ
文法なき人、文武の役まことに武法なき
ゆゑ武武の役はたらひたとへば、相撲き業本の実を
結ことあさはかるごとく気そやうに立ち
きひきやしやなるとも文武云たけくいかなると武
用にのぞましうべしあるどもとるべ、ぬきの墨の
先なる見極すそひ、人ゑけはやうにうへたるを
しぬりたるものに拔群人をぬて武用うい
くしき人あり。色と沉勇と名付う。世武武功
ある人とゑたたぐひ沉勇かあり人うはかに神

のやうにだけくいうすて拔群に脆病なる人
ありこれを羊質虎皮とたとう。羊はむもの
ろさぶやうなる獣なり。虎は人をも獣をも
殺猛獣なり。羊に虎の皮をきせて人うけはを
けくすきまれども羊なるにようそ人
うけはちがひていとなきまきをもひなるといふ
んなりかれぐくのため眼おの沢なれ
ども見明なる人世にまれなりと人をう

一 仲元曰。たゝう武義文義をいふものそや
一 仲義曰それはあさんはめくいなを捨て来斗

とりとめ学ぶべし。むかしこれあるひとは、根本の仁義を立てるのうへに、文藝武藝に志ざしぬるは、末葉なる技能の末なるべし。世俗の情にいつる花も実もあるべきなり。根本立てのうへに、文藝武藝殊外なる重宝なるべし。根本未先後の心得、管要あるべし

一 伝云。根本さへそれ以ているるものをいふ。

仕ようや

一 師義曰。未を学びてるうようといふ文藝と

ちがひて、文武をもつて行ひ武藝をもつて

武功をたてるべし。皆末葉なれども、一つとめたるあるべきゆゑ、心得べき事なり

一 伝云。流勇が世にあてこれ有ばみをぬるさも

のと武道にうつくしかるべきことなんや

師義曰。それもさるのさきなる心得なれども、流勇が

世にあるべきゆゑ、それの先乃目論をそい

まとめものなりと云ひ、ひとうけのめるさもの

は、腔病なるものなるべし。又者なげなるものなるべし。ひん

うけのうけさに腔病なるものなるべし。

もるべし。目明の仕やうをはめることのうくのといふ

るのえんの繪ばなり。ひとりさとりをなればうまれて
もせんかぎり。学問してぬけをぬうのおもうこんの
数をかんがえ功をうらやむひとり恥べきの
なるべし

一　体元問曰。なぜに仁義の勇無の勇をいふ
ありやと。答いはく。なるほど義を守りて行ふ
所義曰。ぬけをぬうの義なり。義を守りて行ふ
とは。是ひとりの義なり。欲心のまじりもなきを
義をまもりて行ひ。自親のために命をすてる
仏るものの。食をもとめるごとくにして死をか

それば。ぜとしさみるこころなり。臨病の狗をたゞね
ぶに。命をおしむに極まり。義をまもりて行て命をす
つることがつねにうるものの食をもとめるごとくある
なに。天地のつねをみてもおろかなるものかし。
ふ万人の敵に逢てもひとりの虎指の孤程にむかうるごとく。
色功おろかなるこころなり。おろかなるこころなるけの
功極まりてぬけをぬうの仁義ばかりなれば。勇仁義のうち
ひとをのづからそれがりてすきものなるによりて。仁義の
勇とこれなり。天下に敵なき大なる勇なるなり
まさに人勇とも名付ぬべし。誠に実の

武ぶすなわちぜ大勇なり血気の勇は匹夫程義不義のヨさまへなく只うしさに猛して人ようちものをおそれざるばかりあれば虎狼のけをげよりしてしく命て人乃のさいつとなきり者なげにして死をおそれざるところが仁義の勇に似れども程義不義のヨさまへなく只血気ばかりまさてぐるしきまれば虎狼のかるまのいとあさましく信あるものを乱をおこすの賊とのハ盗どなんさてまうぶ欲んのかりさあに欲のた矣に

おそるるん臆病なる者の死をおそるるにちがい血気の勇者ハ畢竟欲と利とさうあにぐち軍ヨハ武勇とくけこれ義のかり一ぐ人ん人りあ

ヨどもぐ賊軍の賊ヨハ自悪を捨て淺まりさ挙動ある武篇者ハ本人ぬ一かくのこうあ

ヨハたぐ血気ばかりの勇ヨして義程の勇ふたく

ぬあに血気の勇と云血気のたけさ狂して欲の

おそれぬ人ハ三文一貫の大乃をおこすの勇ふの

たぐすてぐ仏血気のやくぐりぐぐ人あまぐ

小勇ともえ付ぐり

俗元曰大勇小勇に用ぐりはあや

源義経は大勇の人にて有しかども
戦ばかり仕給ふ外の偏のまつりごと
をば行ひおさめず軍法にまて大将なりて
むしやなりてもよろしきくいの武勇人ぶ武勇だけ
の役をつとめまでなりてむしやはよくくども大将
なるべきものにあらず昔より倭漢ともに勇の大将勝
利をうしなふなり あげてかぞへがたし
べきなりてい
侍従向曰軍法は孫呉にいはくはまさるなりてい
極又いはやうは学ばるべきなりてい

一源義曰軍法は孫呉にぶ学ばるべきなり易よりおこり黄帝の
時代よりおこりたる太公法は昔あるべ代この法は漢
侍従曰まつりごとにおもむきてかがくさにおもむき
なるべ学ばるべきなりてい
軍法は孫呉をおりのまくれにんにるなりまくはるの
国のまつりごとをもの
なるなり色のくまにはあはぬ おろかあるものを接常家
猟とたとへくらべくちりぬ昔大唐に名大将あり
軍法は孫呉の学をつとりてそなはりぬ
なるべく文の書をよくこなすひとれども臨機変

の覺悟なるさにより て親死して後天下とあり合
戦一大事勝負して天下の笑種となれり 信玄
の武合一の道おきてゝ ゝ ゝして 徒に技藝
の藝ばかりをつとめ学ぶ 軍法まるなん
とおもふ人は 儒の門に入て武合一の道
をぬけ 信玄 家法を ゝ の根本 軍法の本
びを人 法の本 ゝ ゝ 臨機 妻のたとへ
とあるべし 是は 武家 一の 勢にて
信玄 向曰 士の 味は ゝ ゝ 仕もの
四方の大名 流 士を ゝ ゝ 味

ゝ ゝ 味の 法 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
足 中 ず ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ 士と ゝ ゝ ゝ ゝ
ないは ゝ ゝ

信玄曰 ゝ れは ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ の後 ゝ
て ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
士を ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
味の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
よ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
の三 法 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

まことなく仁義の大勇をもて文武を備りて
ものとしたがひ滅ハあさましく孫子も財寶利
欲の望ひなく功名を儀とし人くに辛りぬるを
中とし人にたかひてひさぐる義理ぶそをしてんりハ
財寶利欲を勇とのこむ事ぬる城下こんぱ下こ
のくせもの沢山よりさめくと見てこうり売こうる人の
身ムあるべきようなくに極又諸士を味をるうめ
三ツあり滅と絶と功とあり此三ツの内ぞれよも
上中下あり滅ハ文武合一の滅なり絶ハ天下ハ
武のみ事とうまとこの人文藝武藝の外智藝絶

なり功ハ武ハ天下を家の仕業の功をつ故ハ
云奔走の人功とかし武ハ天下を家の雄をもこ
武ハ天下を家のためになるすと初くつりおし
武の大敵をかるぼし武ハ武功をこうるなく皆功や
滅と絶と功やの三ツを味の行と定め上中下品
よこうるくもこ分際相應の知行をあ人官職をさ
ばくるが武士の味をふるをこうくあて今も
絶と功とのどうとこハ人ものこ滅のちこハ知ものまれ
ありと見てたり
体元日今時の功と絶とのの味ハむりに接ようく

くるひやに

一 源義口功と名とのなかは昔とひとつはてるとどもに味の
仕損ありしさ友よ人のてくろ上よにちりてくるあらに
くれ損よかるみすはまくくに形くに
仏元曰むくの損ハいくくはたや
源義曰天くろ人のんがおさくれ損よそはばかくく
くりそハのの味もあやまるぐりまそはおく
友に人天のんをいくくにしておそのかぐことと
定めなと功を法の正者の原上中下の品さぐめ損
のかけをくくはくくをはくくはのくりかけれハ法

一 仏のてくをのくくあくぐるかりに真実の法をなと
と功よらくくをくけまに品者の右衛を尽くもの
かりに是昔のおさくくの服なり仏のかどくさ法
変ありてもまた天のんくくけれハに損ゲ用にたく
ぬまのよてくハ天くくくくに人をもおくるぐさすくり
一 仏元向曰月下とハくくくくにつくひくくくくに元
いや
一 源義曰自天のんりちに品立海変とてはくすりも
動せぐくくに心のぐくくに人をくくひまそぐくくハ
大海の清濁とくくぐくぐくとだくくくりに人を

択もてべしてゝ。浮雲ざて賢智愚不肖の差
おのゝとゝくゝ別して乃酒好智あゝ賢人とぱ云ふ徒
よりぱ志をさ方すの淡合ゝらとまゝ。好酒
愚不肖あもゝあゝびれくるするとりのたゝ云ふ
ゝ而をゝくゝ足知るゝぱゝふゝしてお趣の伝にとさて
さーつゝひぬれ人ゝ乃ゝ用るたゝぬとのぱなさもの
ゝそいゝゝひやゝあゝさにもてゝ器とのもゝてた
ゝねゝんゝびゝ。大ユのお家をたゝつゝ。秋赤のつゝひ用
ゝそゝぱゝてんあゝべゝ。ゝ女智抜那の人に。ゝ沒て
なゝるゝ。ゝあゝれゝるゝものなりゝそれもゝくゝ合て

ぱぬすゝぱゝさーつゝゝぬゝぱゝ。貴要ゝそいゝ世乃を入ゝに
気に入ゝゝゝゝあゝなれぱゝぱゝるゝすに。ゝゝすゝ乃ゝぱ
味もゝくゝぎゝゝ人ゝもゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝあゝゝぶれゝぱゝ人ゝのゝぱゝるゝすにもゝさーつゝはねゝゝゝ
なゝり。見ゝみゝゝむゝゝゝとゝにゝくゝゝ。悪のゝゝゝくゝゝさーゝ
ゝゝゝべゝき伝ゝのゝゝとゝぱゝゝれも亜にゝさーつゝひゝくゝゝゝ其
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

んくゝさゝぽまひくるをおこれるとぞ是の屎下をさて
はりきを磯石の絃をさそふにたゝくちをくのを
のをあつめをさて磯石をさつくるに絃ゝりかハ
をいめものかりごきごとくゝ是のんぽゝけきバ何
かごゝうきゝ士をあつめをさゝくもかれをバ用に気
是のんにひとゝくぽゝきゝくせとのちゝてハさて
はクひたまハねものあり是ゝうあにぽゝうきゝ士ぽゝ都
中よまゝうてもかきにをれかゝとちりゝ是のん
ぽゝかれハ是のんにゝうをひちゝうきゝ士ちゝでハ
ゝ一つハぬあにぽゝをものもゝくよみけゝとぽゝをし

ちゝくぽゝとなくゝぽゝくゝあるゝものかりゝちゝうあよ
ありきゝくをゝのぽゝ都中にありてもおきにひと
ゝ屎下のゝうきゝもおりゝをきゝもぽゝのゝぐゝくもぽゝ
も皆是是のんひとゝよぽきハまれゝをぽゝとゝに是
をゝをきゝのかり
体元向日清方ハ数ゝ多くぽきびゝくをゝるゝ
ゝくゝ者ゝや
源義日ぽをきゝ清方の箇條ハ所よりをぽ時にゝり
てぽゝぐゝひるものおれハ多ゝくゝきぽかきゝゝうきゝと
も宮めあゝぽきびゝくゝくゝてぽゝうきゝをもあゝぽゝゆゝく

してやうさうのものあれば、さびしきやうなるものを、
ふるきやうなるものとも、やむごとなくば、ふるびたるものと、
おなじくしるべき理にて、ものさびたるやうなるものを
きたなげなるものゝ、あるべし。若のんめりとして、
世中のよのなか、ことさらなる政の根本なり。法度の
箇条は、政の枝葉なり。若のこゝろむきをば、ものトも
なきものゝ、とゝのをれば、若のんめりにて、行ひ
ぬれば、法度はなくても、もとのごとくのんめりなる
ものなり。まして法度をとゝのへ、をのゝをば
刑罰にて、おしゝ、ぬれば、安
寓さうゝ、長久にあるべきものを、推しくまぢうのく
治ると、法治と云ふべし。政教なくして、さびしき
ものなり。素の始皇の仕置、法治の政なり。
ものの多し。法治は、きかしぐみ、ぐるゝ、をの多し。始
皇の法代、後として、ゆるべしなし。まぬかれず、のく。
世おなじの政、若にうなひぬ。おほやうなるをもとゝ。今
世のやうに、ゝくなひ、ゝる人、ゝをおさむるをもとゝ。
のをもまはにたゝへ、ゝ。何ごとにおうが
まはりのなり。いろはによりて、をけばごみうを
川にてゝうへ、うをもむものなり。これすてんにへ。法

治法治のふかのゝ〻くんはるべし。法治ハ先ゝあん
と正して人のんと正をるものゝうたゝくハ大工のをを
うゝ。をを体ろくゝあゝて。扨のゆゝをあをはゞゞう
法治ハあんハ正うゝびゝて人のんを正せんとをろゝ
のかうたゝくハ後に立つ。ちやくゝのゝしやうゞゞあゝ
をゝし。をのんゝのうゝなれハ此味正ゝく。法度乃あゝ
為にをゝをゝくゝうゝびゝをのんゝうけをハ万ゝ此
此味なゝにゝうて学ゝくゝさゝゝくゝむさゝゝゝる。法
度を定めゝまゝかゝゝもあゝ。あゝため。智ぬゝハ万ゝ
うゝくゝりうきゝなゝ

一 体元向曰。法度の学問ハ。ゝうやうに。ちゝうゝ
対ゝ。まゝゝ仕垂に。をゝうゝ。法度ハ者ゝや

一 師義曰。仕垂の学問ハ。をゝ儒学なり。をゝ儒に
ちゝうゝひて。学びゝうゝ。ゝ記法度ハ。治法として
事をゝて。定ぬりのをそハ。一偏に定ゝるをハ。死法
しゝ云ゝ。用にたゝぬりのなゝ。法度ハ。迎の影ハ
法人ハ。用禮をゝに。をゝ。さゝめゝるゝハ。人天
地利人情の。五善をゝ。をゝうて。定法ハ。法度の迎ハ
ゝ。をを捜ゝ。定法ハ。ハのかををゝ。ををあゝに
ゝをゝ。法ゝ。ゝ代の法度と

宮く。師函かぐ刀とする。そう事のあとに。おつまを
ものの人のようくいあつと。ゑ者の法と云かう。を
ふとぶちうぶしして事のあとをうを。ふかいとして
ものとをるを。膠柱の死法と名付く。おろうる
して。ゑにたくぬのかう。仕函法をもる。仕ハ
ゑ者の法をかうして。根本を宮く。周禮あど
ふ。記とをくるものの法と考て。そなをさ
ふう。政の境ふ。ふとく位と。三文お函乃。ゑ
者とをくふかして。まお古不易は。中庸を行ふ。養
要をていゑ。理をて。論じてハ。ゆきふくき

ものなう。用のまへなるすはたとつく。仕徳ふう
ぐらくいふうあに。禮記よ。をさの仕務と。耕作
のすとかりて。儀編。教ゆあれハ。耕作はたとて。
ふうくいふとハ。天の時。去夜秋冬運命乃否
業と云けうたとへハ。田をうちた稼をゆ也。耕作乃
他法。いつとめはてもゆ勇はたくぬものをていゑ。耕
作の仕務ふ。ふに。ふうて。用はたくぬをていふくいふ。
時ちがひるはるくふ。労して功をくいふこれをて。学
問も政也。運命気数の。時の宜と。知が。弗一なるすを。
仕徳をべし。耕作の時をていも。畠に稲をうへ。田ゑ

豆をうへくはかどせいるへこゝをもつて備程をもて
うたゝねりのまそこ芝ハ時もよく耕作の仕様もよけ
きこゝろ所のちゞひくるにしたがつて用にたゝぬをも
これをもつて学問し仕垂し水田の地程を知り管要な
ふるすと作法をべし耕作の時玉田に稲をうへ畠
よ菽をうへて天時地利皆よくゝをいくへも他人の
田畠にうへつけぬれば家用に立ぬうへに常て益のと
がめあるべし。これハ時と所もよけれども伝ひのが
限ありこゝまでとそろあなりこれまて学問を改も
人位のゆゑを知り大事なるゆゑ耕作の

時所家田に稲をうへ畠に菽をうへ所も時も伝も
よくゝをひてをかれる苗をうへ菽をけ苗を菽
うへてハたゝぬりのなり芝ハ天時地利人位皆よ
くかなひても苗と種に仕程ちがあり芝ゝて
芝居も改を苗とをり種となる時法の仕程あるさら
ちがゝぶれハ時と所と位やにうをひて聖人の法を用
ても益ちくさすを作法をべし時も所を伝もらく
あの苗も種もらくいても。ゝこゝをし家をとる備程の
仕様あゝくれハ秋のとりをちものなり。時所伝
苗ゝぶれもらくてもへまのつとめたゝさるあなり。芝

ゆく学問も改もぶ人事のほとあとをけさうにぐ。管
要なる事を仏徳をぐ。時も不を信もらく知る
ひ苗も稔るよりぶ人事のつとめをよくをこなげまり上、
も大旱にやけ出来よりぶ天地にそこひ。出つさ
てかれて秋のとりこちをさすすをと天災と云て運
命のおに天なり。時不信のよくおのやうにぐ。
人事のほとめをとげまんにぶ皆人力の力をそなにを
さるにようてをよくく人事と云人事をよく
はとあてをさいひにあるる。運命にしてぶ力のなさ
にあるぐれぶ天災と云ぶりぐ人事をはこわむこしてをさ

ひとあるるぶ天災とぶいぐ。人為の薬と云ふの
なり。耕作をあくしてとりこちをさぐこしぐ人事
のほとめにをこちりて天を信事ぐ人るぶかな
ふをむぐことちりこれをて変ぶ或ぶ変ををこしぐ
ぐ。或ぶ変をうしをひ。出をれるぶ運命の得喪
とりく仏徳をぐ。やうぶ論ぐれぶ品多くむつら
しくやうにをぐ。ぶ怪ぬれぶ出をれるる
つよ極まりぶ出ぐにぬくをにぶ天地の人
事のほとめ運命の宣皆かぐ見れをげをうれを
ぐしく

仲元曰学問と改とハ各別なるものとなれども
ひとしく言のあらく治方をやぶるやうなれ
ば義曰道ハ世間に学問にてなべて生ずるものハ
ひとつもなくいづれの学問ハ道を
学ぶにあらざるなし道ハ天地を形の
外へ通じ上も形ハ知もなく神ハ不測なるものな
ればなり天下安を治る政ハ道神通明達一のみ
あらくいたる政に政ハ道を用ゐるとなり
学問ハ天下安を治る政なり元来一ツにして二ツ
なるものとんぬ是一ツ〻ハ法度の箇条
ぐらい政あらくハ形なくハ天子諸侯の分り行ハ
治ハ一事ハ口のさまゝ一言みな志さの根本ち
道ハ政と学問とハ本来同一理なるを知らぬ
んとべし
仲元曰道と道とハ別つてハ者や近又
各別なるものにて治ハ庶幾
義曰無なるものとなれば
大きなる徳と名付るに当ちなるとなるを
ひろく云ハ道と云大きなるを云ハ

徳と云がごとし。性のあらはれたるを徳
と号す。性のかくれも形くしもなく。廣大無量な
る所をつゝみて徳と号するなり。徳の字を極
善大達の字のこゝろをよくめり
仏元曰ゝこゝろ云ものゝそなはるものゝやうにも
あるべかゝはぬものゝ名くいや
源義曰ゝ法ゝ代はゞのこゝろをのなり。
仏法あゝゝのんみゞれゝる代はゞあるがゝは
ゝゝ細はゞゝこゝろあれゞゝ法友はゞれいま
しるんゝゝて法ゝのたゞけとおもはねゞゝゝれども

ゝこゝろ云ゝをゆゝゝゝむさとせりゝ形くあゝゝ
おゝゝしおゝゝゝゝこゝろはゝゝのんをいまゝゝむる
ゝゝゝゝ

一 源義円さとりはてしハ。云徳乃郡のことゝかゝ
ま。ハ中く云繁まゝ乃べくゝ。ゝくゝ。ゝ皮層のをさうを
みぐりたゝくまてさやゝ。各都ごゝとのゝくゝ
ま。ひゝゝる若のゝに。仁義の神理をゝりまさまく
ゝハ。盲目のゝ加ゝゝをゝ尺目けざるゝこゝゝのゝ
ゝに。ま。ひゝく理ゝゝさゝものを。ん盲とゝ付ゝり
盲目ハ。ゝ黄赤白黒のゝ。ゝ。ゝ。ゝ獣の形ゝ
耳ハ。ゝとゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ尺ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ盲ハ。仁義禮智信のゝ。天乃神乃

運命生死なゝの理。粗耳ハ。ゝとゝゝゝゝハ
ゝ乃理とゝりゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
神理ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。盲目帝代
の目ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
尺ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
生死のゝとゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

白をとりかへてくろをさしらとをつけたり。悪の
こゝろ。ゆゑ。ゆゑ。凡夫の及ばざる所なれば。ぜん言
の眼をひらくべきこゝろ。なにたとへてらくく体徳まで。
大災の悪の人。現世のあやまりにおよぼして生ある死怪
のことわり。天地のかれたる理まで。黒白の分をもとう
りごとくに知らしめ。善悪応報の神をもて
ひらかせ。凡て食。淫。しての心にて人乃
かもつをもとめ。ごとくにそうし教をもうまへば富貴
ゆゑくしおごらば貧賤よりくもたつらば
さいひをもとめば福をもとめば生をもとめば

死をもとめ。くまば兵ひきまとへば。仁義を乱る三才一世
の外をとこのゝ行ふる。福石の祈をもとめ。醤油乃
南北をさゝげ。ぐ。ぐ。ぐ

ぐそくのものさえのいとぐるやまそーの人ろくは賢人
愚かなるものはいとりたまくこのれとも或は不老長命
のてくそくちくてーぶん人西人は世界よりみちくくて
沢山多り益城などをはつれの代よりもさげ米くく
ころせとも殺すで名よは風風癖ありて者稀は賢人
龍のごとし獣は麒麟は走はまれのて狐狸は毛
穀と知る菜木は美菜名米はまれうて名よ分
き雑木雑菜は山野にそそり天乃は純粋色者ある
ものとて及ばぬさりのは多人のしさものはとくなき
苦まそこそ人帝てあるさものく沢山あるは何ら

乃雑ちくくは生ものや
作義曰よき不審まくはそれは易学ときはめぎ
迷ぶ門てんゆさるあるは小はそそもも大方をかくれ
中べくは賢人云々風風麒麟などと者と宝ぶ人
西人云びくは孤狸を西と宝ぶ者西の三字あく
くくてそれをそまくぶ天乃にとーあそぐふよよ
くくーー河こぐひまくーやはぶ根本とくく者
んくくさて投案を此味ちくるぐよくはぶ天乃を根本
くて生あくる万物あれは天乃は人物の大父母まくて
根本ちくは人物は天乃のみ孫まくて投案ちくは根本

の天乃飛粹と云て色々の事ありて色の悪さ神祇まし
ましませハ枝葉の人間も皆色々ありて悪ありと
はんとへ〳〵凡のはくらに第八すゝぬと云う後のこ
と〻おうれしもの事を皆ありて悪なくさ枝葉乃中に
精粗の差ありて色々の中のとゞれ〻ら極上を精と
云ふ中ちのくらを粗と云ふ精粗の二字よりく者子ゆえ
風風雲雨なとの形のるゝ下と定さて精粗乃八
地の行ふを天命のかゝ地祇祖の後にうつして
四のさくを云ハむるるゝ中来悪と云ものハ皆さ
のをれ〻も粗なるうたちの用ひ〻〻〻〻来さ

ものあり者るなに悪を後不の家はたと
くりを虚の円形あるかゝの物八精粗のりるもの
その八形〻〻日と月と天の精なり辰八天の粗なり
地をせびる山と田富る地の精なりけらて毛
の形系八地の粗なり毒風八毒の精なり毒猪
ちゞ毒の粗なり麒麟ち獣の精なり狐狸八獣
の粗なり芝蘭八草の精なり沈香梅檀八木の
草の粗なり沈香梅檀八木の精なり雞木ち木
の粗なり熱して天地万物ゆるるものも精八也
く形〻〻粗八多きをびてゆたとへ粗をこゝ

ふに。松ようなるもたくさんなるまでの木らんそを数
とゝゝざるわゞ。ぶんなるれども。松ハ一おなじでハ敬
敬せざるゞゝしさて。いづれの物もそ物のうちふ
て精あるものハそ物乃うるめとなりうをゝり粗々
そ精よりあるそのあり方ゝにより人乃精
とうけゝる。聖賢君子ハ愚不肖の立ゝ
不肖ハ陛下として聖賢の下知をゝふ天命
のなれなり。中庸ハ中庸ハ知者ハ
なれば。聖賢ハ聖賢ハ賢をくゝる陛下とゝる
肖多ゝとうゝ見ゝ。ゝかはり精ゝ聖賢

君子ハ気清質正ゆへ。ものづゝ相応の音をう
しなひ粗とうけゝる愚不肖ハ気濁質偏ゆ
ゑ。ものの仕至ゝ。われハ相応の音をうし
ひ。ものゝ至ゝなれハそれよりあやうして相応の音
とうしなひ。ものゝ至ゝなれもの。ありたゝハ。ゝ
もゝ下ゝ。ぶゝ。ゝ。ゝ。

分こゝに逆の位についてそれ〳〵の所作をつとめ業
大作又傷の所をよひらまゝ〳〵力を尽し毛巧も邪歌
の道念おく。あの不儀とも行ふあゝて天下に人
し道人多。竟舞の所作ハ可封といふハばすなわち
ちうるとさハ道徳不肖の人とも道人と云つさ犯なす
なす未人ハ所と賢し道不肖も皆人ハ如しあり
皆人の内よ精粗大小表裏の発ゆゑ賢ハ合
の内乃精ゆて実く道不肖ハ合の内乃粗ゆ
て裏きものなりたゝ八合し邪を祓も強も
来皆合ゆてこうち仁精粗表裏の発別あり

合邪ハ合のうちの精ゆて実く。祓祓ハ合の
内の粗ゆて裏〳〵かやうのたゝ八とゝく
作法してなす未人ハ皆ゆうの道ゆて道なさ面
目を観念ゆべし
体元問曰天乃ハ福ハ告猶猶とて告をなを人ハい
福をあゝ道をあゝ人ハ猶をあゝ人ハ猶をあゝ人ハ猶
よ告人し仕合道或ハ猶にあゝあり道をなゝ人
も或ハ志ハ心をよく さいゝひを以道のゑみいハ猶ゝ
乃理ゆて小
所義曰ゆゝさ疑ゆて心も易学をさいめゝ

らちあらぬる事によりてこれ大方もくりのよいに人の
生涯のありさまをよくさはくくとも畢竟
天賦命下六つよりくまれ。書のかがき筆さ文盲の
賢智及不肖。貴賤貧富の定一ならず。さる勇乃文
智藝能の善用法に賢智及不肖二つなり男
女のさうち。貴賤富貧能の定三ちり。父母子孫兄弟
夫婦兄弟朋友の偏の孤の吉凶乃定まる八一生涯
の間。発さる事の境界の善悪。福福の定四
ちり。形の美醜出類力の強弱。疾病病もの定五ちり
天乃鬼神の嘱感。出行の善悪の報應をうる

雖易の定六ちり。胎の天命を十ケ月胎育の
ようけ定とせるの為れば一生涯のあら
さはことくをけ振ちおうちおくる校案義定
ありとなんをべし。さて十ケ月の三百七十日の間胎
育に筆の陰陽及りと月の陰陽及りと日の陰
陽及りと。時の陰陽五行とのせ変化收義王相死
囚老の気胴温雑操して造化するにちりて運命
ひとりうごいさよまくいさ善悪報應の感化まぢ
しくへまり子友に。六四月命を皆よき事計係て
付すはなるぬ移ちあくいさるにちりくへ

老のかうさ海。海まて文なきもあり文かうを
海ちかさもあり文海をさく貴級あるもあり
富貴なるく憂多もあり。わかさとさ志ゆをう
て老〳〵養生のもあり。ぴうさ〳〵きを不安あり
して老て富貴なるもあり。やー〳〵さらふ。
むまれ〳〵貴人の位よりをあるものもあり貴
位にもく。やー〳〵かつもさるものをあり。貴
級ありて貴なるさもあり富貴ありて苦みて
うさもあり。ぴとに多くさ海くのさ海ぶらく、
つらー〳〵これみな六ツの命をうる所。陳陽

よりの生長化。收義。王相。死囚老の気運ぴうも
つとも不及あるにらて。ぴかくあるあり形の吉凶。
長短大小をく。形よ凝定にらぴくこしも貴び
ぶことあり。これまかの命をうる所。陳陽
まち定つくるものあるよりて貴ぶるあり
級宇。ゆ海よの運命ぢさりさ海に。一か貴。
やとくいぴ運命の勢ありて生付たる人ぶ貴級
六極の中質あれば。ぴ理とくもしられ。福吉
猶強の如理ゆ〳〵めくー。ぴうく仲語ぶ。
福吉の級と文福と言ふくぶつあり。天ぴぴ級と

いろくゝ告人まあるゝ人ありゝ。一曰壽。是ハ命のながきを
云。二曰富。これハ財寶たくさんあるを云。三曰康寧。
行ハ身さいわひもなく患もなくやすらかなを云。四曰
攸好德。是ハ德をこのみて天理の樂を
好ム素位とゐるを云。五曰考終命。是ハ天理の完全ふ壽のうすを終
くして正理にしたがひ安くしに死するを云。以上ハ福
の極と云なり。極ハ福德のすぐれたる
云ひあ 天理ハ六極と云ひ
一曰凶短折 凶ハ惡道 短折ハ

短折ハ天理の完全ふ壽のうすくして死する
者と云。二曰疾。三曰憂。四曰貧。五曰惡。これハ自暴
て。性付剛強ゝて。欲ゝ多く。仁者の儒者とをゝ
ゝ。又ハ惡道を好ム人を云。六曰弱。これハ自
棄として。性付柔弱ゝて。仁者の儒者とをゝ
おもひ人ども行ゝ。又ハ脆病して欲ゝ多く不足
天理の業動のくゝ。苦せにもおとろへさせある
惡と云。以上ハ六極と云ひ福云極の
きゝ。書經の法範ゝ。天理ハ五福六極
いろくゝ善惡と。一ハ云ハ溫ゝ。又ハ熱ゝ。秋ハ

涼冬ハ寒ゴトク。昔も今も未代変ハなく
物理なり。おろれども。人人
も六極とのがるゝすべなハ天の財ハ地の利ハ
ゝ云て。虚ハ実にかゝわさぬものゝ。五穀六極の命ハ気
ゝ属して虚なり。胎育の始ハ受精ゝ運命ゝ
形ゝ属して実なり。故に虚あゝ福極ゝ成して
一生ゝあるなり。たとへバ六月の土用ハ。さハめてあつく
ゝ成ゝ人身ハ冷ゝ成ゝ。悪寒の病ある人ゝ
わゝ六とゝ成ゝ。さても狂ゝ。ぼゝ物月の大寒
ゝ成ゝ。さて火にあゝゝてもあつゝゝぬ

よ。大発熱の病人ハゝゝぶあさても狂あつゝ
の人ハあゝゝあつゝ寒ゝ。ものの病人ハあゝゝ
つゝ寒ゝ。同しものなれども。暑熱ハ気ゝ属
して虚なり。悪寒発熱の病ハ形ゝつゝ実なり。暑熱の気ゝ実なる病邪にゝゝ
有に。ゝゝ。ゝたとへゝて。ゝゝ作逆ゝ
青六唐ゝ盗跖ゝて。大唐一番のゝんどゝあゝ
も悪逆ゝゝゝゝて。人のゝゝゝゝゝゝ
ども。江病ゝ哭に出せして。ゝゝゝゝ
ゝ比孔子の法ゝ。新ゝゝ人ゝ。三ゝ人乃

法華経のうちゆゑ接鄭注釈なる大賢人者
達ども。第五瓢酒巻不変延命あり。ゆゑ三のうゑ
ひに達ひく。古来多くの脚伝ども多い。運命の
勢ようゆゑ。ゆゑ別ゆゑ大ちひまを見て。
万古不易の天理にゆゑ。ひとたて。秘密猶遥のさ
たも。信偏ーかゆーもぐゆゑ。六月の出月
ゆゑ。ゆゑ病人を見て。変の異と云ハ偽あり
くゆゑ。極月の大寒ゆゑ。ゆゑ病人を
見て。冬の寒ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ云ゆゑ。ゆゑ
わきまーゆゑ。ゆゑ異の理ハ。ゆゑ

知やゆゑ。ゆゑ。ものゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ

其の神理をうけ給ひ、万世不朽の威名をあげ
ぬれば、六極の報恩ちさうの〜ばやまく新に入ハ業
新陋巷不変なれども、五福の彼岸をうけ給ふ楽
のあ福めそたくして、其在不滅の神理ゆゑに、帝
ろれ右にいまして、四配の位にのぼり、万世伝後の
祭祀をうけ給ひぬるハ、五福の嚮命ゆゑなり、況
や、運命の勢によりて、一見又ハ福者猶溺の
者よりたゞやうなれども、畢竟実の強的強弱
天命ハ我の者にたちわかるものなり、これを人元
則勝天天定亦能勝人と云ありて、上の福の内の

彼岸溺だようけぬれば、彼岸の只ハ内よりそなりの内
溺をでにゆうなれば、彼岸在不滅なり、見者上
ノ、其生ハ大富貴とゆうて、小富貴とをれぬ、
見又ハ上の富貴なり、一般の憂ハの苦とをるゝ
れば、上の康寧ハ、事上の康寧にまさるなり、若
強命のしくハ、溺あるゝハ云よりよく、見して極苦
の極をいふ、五極の内よりて、西弱の溺とう
けぬれば、彼岸ハ苦を内よりそれ、まり、其強、其の
神理をうなひぬれば、たとひ苦めして、欲れ
ずしても、函経祈よりそなり、欲よ頂なく

只貪りぞ。むさぼりうるれば財寶ありてもこれハ貧
若なりこれ。ぞ。ひねれば。肉よりれ耳よりぞ。
みなくるしことなれば。法師ようて形やをうらし。欲心
のくるしことをよたしぶれば。憂なくてもこれやをうらば。
是ようて。福徳の極をいはんとべし。立福の中に
仮好ほとのせ。六極の殘に悪弱をのせ。後人極を
うくく。嘲戒の通をべし